



假名文選かじんせんと云ふ。

物を好このむの秀うれと

も其そのれを茶ちやに作るも

是こゝが先師せんしの筆迹ひつせき

狂文きやうぶん哉や他たと書人かきひと

の文集ぶんしゅう紫清むらさきせいが仲氏なかつぢ。夫こゝも



序

折まの風来ふうらい假名文かにな選せんといひやす。

錠前ていぜん鏡物かがみものをよのりの秀白しやうはくと

すまゆれども其その糸いとを茶のたるるをいひ

ではかり。是こゝ家いえ先せん師しのまままにままま

ありて。狂きやう文ぶん哉や他たと書人ひとのままま

白しろ氏しの文集ぶんしふ紫むらさ清せいが仲氏し。夫おも



務に至寶あり。夫先生の文
 又活きつる龍の如く。彼度山
 の文照覚筵と。そるう足下り
 掛川覚筵詞又嘆息花覚筵
 を。堅いやうやく和らぐ。浮世
 覚筵の世話又わらう。いふこれ
 ぬ味いる。あつらふと天より
 比翼覚筵の飛ぶ。いふ年
 枯子。又地より。連理の枝れ。
 孫覚筵と。塙も悪者よれ
 也。かゝもく。世上の戯作者。
 若く復かぬ。いで下れた覚筵よ
 多をつら。は書を。おしこ
 尊師様と。我々の先生の

自撰書して序文の明哉
とふさぐ。

于時天明八の歳お月廿日
他なく出を乃述こす事。
おつ目よ述之

万々事子

佛法 奇瑞 妙菩提樹之辨自序

舊板を初大よ行はるる慶威よ及ひ見安
から秘かて行のふ草埋本となるを此
この人の手をも任せ并別なりとこそ小が

或人南無阿弥陀佛の六字を註釋して曰
それ南無といふ南字と書きよふ文字を死で
仕者^{みまわし}は比^ひ身^みと無^な後^ご生^{せい}と預^よへといふ公阿弥陀
と六世の人と救^{すく}をせよの彌^みと行^{ぎょう}よ徳^{とく}分^{ぶん}れ
もと^{もと}お^お法^{ぽう}也^{なり}預^よ佛^{ぶつ}と念^{ねん}仏^{ぶつ}と云^い声^{せい}も^も編^{へん}只^{ただ}

名實之口の肉をそがゆとせよとのり
なりと志りのなぐりき侍る如きとのり
扱如く是より殆こありなぐりひひ掛り
引きもせげ嵯坐の釋迦でも言光寺
でも用帳も出る事への宿生海邊の勿論
せねども二つある系詣の教談とあきら
むべきを如來と市と二種とのさ美ひなる
此書の序と云ひし

風車山人誌

菩提樹之辨

今年六月朔日より本願院におか
信別言光寺如來の用帳系詣群集あ代
東安のゆいんと此知る延なれん今更のり
ふとく一往あり日延の日帳もよりなる
室七月本日の曉帳より用帳有る御
十七日此日中より推し知るより言光寺
如來の言光寺のりて菩提樹と稱しむと

我先と是と拾ひらふ二十年か定依の時も海一
 あり又今年も少しあり六歳ふ世に流ながるふ
 及びとりとも佛法の奇瑞有ありすと諸人
 益えき濁じやく作さと追おひ言いふ是れ此方より予も是と
 監定かんていせよとをりせむあり七八ヶ処あり及ある
 予皆直ちか真まの善提樹なりと答こたへる或日門人
 何来未掛なにきたまがくと問とひ曰い先生彼を以もて以もて其の
 善提樹と答こたへむあり其の不ふ秘ひ言いはれありま
 善提樹ぜんたいじゆのゆゑゆゑ翻か訳やく名な成せい集しゆを佛ぶつに
 生なし成せい等とう正せい是ぜ志しを以もて是と善提樹と
 いふととも狀じやう狀じやう偈げ確かく類るい書しよも出いり又また元げん孝かう親しん
 書しよも于よ光くわう國こく作さ宋そう西せい入にゅう宋そうの時善提樹の
 種たねを傳たづへて後のち泉せん源げん寺じ六角堂りくかくどう因よ寺じ町ちやう又また叡えい山さん西せい塔たつ不
 わりと貝かい系けい先生せいせい文ぶん和わ華か料りやうも詳しやうも出いり
 又また後のち後のち國こく鎮ちん西せい本ほん山さん善ぜん守しゆ寺じ中ちゆうに昔むかしも本ほんを

系脚て右の舌先せめておろすのうりこは船中
と休とを徳の芳も安んじたる夜一夜金
佛も願わぬ眼も事もめまじしまじし時より冷
けつて去らるるものなり一母又極楽海舟の
切多ぬ速い舟なりと我々の死地獄極楽の舟も
志せらるる一生涯佛と遠く吾極と積てこそ極楽
も至らぬまゝの上におよぶ中におよぶ生も死も
九品の階をたゞらるるまで極楽の極楽ありとぬと

安んじなき分なき又愛財もとる又百愛財も損傷
よ損傷の申すに極楽の切多は安んじ世智業の
人同も二百如くと悦情と笑とありとのるは達
とありと事分の百と億万劫とある百味の
飲食振舞も夫人と揚格うとまじはるる夜
夜への夜の浮中親系は安んじのふあのと我
と我て只の事ハ堪ふと悪作りのふらんまを
此の又と指すので願ふ極楽がとるるものなり

から極度受世でもつて思ひなきも此も
仁の端佛家との措縁もそつて不負て得ず
ゆかり衣たる愛つて異と為す程の毒を思
つぬ事又又其言先如本と負衣の如多言先を
負むと云陰徳のまゝ陽報のりそ此むく
著く負の負つてと云比喩めど一もつて我
ねくゆめと牛もむむくもつて死を牛も
よ加あふ佛おむむくぬる人を佛おぬと云

る達も此物おぬ三玉佛奉の圖字檀金の
事と物も三玉の持はぬのまゝ女は此代
とぞもつてとぞくひもわつたれも此代
人言もつてとぞぬ圖字檀金の名代は此道
如本とせられもそれもあらんなり只一人を
と起が味ひを安めぬの三玉佛の二人売の
ゆへぬ又其代の名代は云いも此代は
本代ひの持たれ曲がお意とつてなりぬ事とて

の初造子の標より考すや如後天竺より渡
りての記を觀するに服之もなしく圖字檀金系
遠なる所の法テウノウハの族奪ひみんりカクニと爲て秘佛
として藏之也佛ツツをたの海物ありたグイヤ代々の
お互のとも程處をを移る去とは其輩子
方なり抑美の量身カクニとヤキるなりとく
そぐとくまがとく進ぐとく弟本玉土にりて
若ぬ糸の細工がれば廣大を造つてをりぬ

圖字檀金も焼付る獅形シウケイを標するなり
皆日一前之入るの目くらんれい金のそく
焼付る獅の標も之とも佛の目よりくる時
金も紙も銅も皆一團イツエンの土ありて佛の照る光
明之砂度サドを不祝フシク時の幸も念佛もて儒者
の獨ドクと信シン非道者の心直斗て融ユウそそのの
かりと融ユウがられ融ユウを告ぐる考とびきキキ葉葉エフエフ融ユウり
て手おさえてまんが的テキに掛るふたほじられども

象牙と象牙で試みる事おれかまのり
かすらさるる委ふかぬ物あよ的よ掛て射て
えれが今の矢の上でござるとのめと目あよ事あ
垂る事さよ向て念仏や悪念と去て善念よ
まゝなるも彼の射をて同浮檀金ても焼付
ても目あ斗れ事なれが貪著くわんしやくなれ事あり
只人々の力お存らば強くも弱くも可也的ハ
金ても焼付ても一む石札よ射す時ハ風やんで

埃かみみく流静て水清し悪念邪念の玉を射て硝子
のどくをれとれがむが即火珠よと燃のや木とら
せ然る其付悟を異なりとの事其の耳ハハ
是も象牙いごうよとや木とらるる有明の硝燈しょうとう幽よ
ちうつれて水ハ水のべと明よたり

跋

去法方若光寺の縁起とまの取の取の如外若光を

負取るといふ海と定まらぬ圖字檀金に於ける像の
小像なるより一若光が又尺の體と一寸八分までおひ
あつたまゝの像とて或人等やそれのそとに佛の毫
カも一寸八分はさ像とて尺も七寸も忽ち受と
あつたつととも合はしむるはた往來方日をたつと
さ像をさして負んより竹雲とて座をさすはたつと
形智恵のあらぬ末まで流生無なる末まで
或人又やうとて一應弁樂も信らしむる若光の像と

持されたる佛の毫カでも柿の蒂で合点せし雨時
や某れ少云曰嗚呼妙なる生る度一がじり門人

江戸男色細見序

餅好酒中の趣をあらはし上戸ハ又羊羹の
肯地とて懐むる暑者直萩ハかりあく一肘を
る一妻の花秋の紅葉何れとて捨つづれ
とつとん男も女も其あるも亦あつた

花吉多子細見あれが堺町木挽町よき
四季折々の番附あり世の人善く有り
かゞぐれともねくハけ及の盛ありのを
あつさり悪疾マ智の元夫もあつらんとい見
の腕をささるりつみつろく者頂天よ
あつ中よ身を操くともろろ柳の流言を
そこをかくとあつまければ別達の名よ

その歌あつくとく目のあるに生あつ
まうる名流やせと夫よあつらんは是歌玉の
かこまりあつらん餅好の流言もみよ
まを笑あつらんハ一番話つろの精を
食あよあつらんハ酒中の趣をあつらん
よのえ申あつらんハ水虎散人悪言を
申よあつらん

そこのり
はみぐき

嗽石香

右をあらうし
口中ありき
白ひをさる

二十代分入

き業代七十二文
つちうへは十八文

早

十の甘く 採^{そく}私^しの^りの^りは^は八^は方^はの^りの^り採^{そく}作^さり
四方は四面は花を建んと存立する甲斐も
修され不仕合商は換あつてき 滋^き園^う庵^ちはあき

くそらせぬも先へしありごとく 採^{そく}作^さり
清方より何ぞえまれつらぬ商賣おもひ付
くやうはと清引立せ下いそみかきれ候今時
此皆様の能取存れ上なるはかくもハ冊^ヤ手^ガ
のふえき定をそき^ハ尋^イき^ノれ^バ防^チ州^シ砂^ノに
母あひをいんく^レれ^ハお^のひ^の付^少て^右を^習る
かうりはくえき下並れあつて水たへる

ひつ 牙を搦むの板をさすの所の
すのくはてする代に引くは依りけ度お入に
仕世とれ代入の目方二十代をう一おに入
つらひ猪よりよく代が落ちる楊枝が
よごれるとややくへちほふるれや之換
仕がでせりあは積るやうり利を九下並
に差上中をせ帯方の候私ハ文旨急
よそ

ちんあもあなとども是も去御方より
そま一に歯を去るく口中をさしやうは
あしき自天をさり熱をさほしき外あぐ
さる富士の山など機能をくはれせ方ぬ
付へるはえちまうあうのちど私ハ後中
まで一向存し中へた言が歯をみぐが肝心
はてそ外の機能をきうべとも言ふもほるは

まう傳へられたるも人も丸で了る廉でもなく
之をよもや無くくあるまゝと存致の趣
業符を各々み置か念入調合仕ありやうの
残が有りさのまゝあゝ賣出の御つゝい置
いて第一ふとくたのり御おやりは持
けてもまゝれおれらぬ損取方の藝つもつて
山とやうして大よ為よお成り一度切めてぬれ

お下とも御帳上極々母以存
り又のそ入る能くお存別は持り之を
各根取自負所を之しては繁昌仕表店
各生金看板を輝くせ今れ難儀を昔語
と御引立れらど聞くるまゝてはるる
ちの希上はをの御取の御様よりさし
てりあり下るる店の知人

二月廿日

川合助元無

賣弘不

中白限丁也下目南うハとも内くう店そ
多ひそやと助
くりんおんのひよりド屋安んらんあり

出店ハ勿諦乎也中々其責ホ一切出幸に於て私

自才出すに

長持傳合戦後序

孝亦忠信を以て祐一才に行ふ君子あり

尚世を号して母美といひ武を知り玉衣

と考る者ぞ人嘲く彩吾凡とよ又け後

とまぬのきんととよにまけハや一と呼び

且のちとよかへ影ハ白きとつらび招指ハ

細きをわくとぞ今この浮世よ文らんとの可境

とあつらんハあつべうとと書下の鋼鍊格

まらんうらう坊が亦そと成ておづ坊と成る

このむつとまのひかりー九かりーしる拍子紙
のめしとかりひ男とだんちあつてたと母の
未山のねく虎ぬと母をこの足のもや
の地づくへあつてももあつた甘あつとりのあ
しこののえれまあがまをけりてしるが
入ぞらう苦がらるる男のうはなれもらん
りーらうあつてしるらうらうらうらうらう

とくを男もともよおあつてき
ふあつとづら^あのねほも叶りぬむかへ
がれー二人が中らふやうにやまをきどもま
らあもあつてものみあつたあつたあつた
くらうあつてもあつてもあつてもあつても
実^まあつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても

子眼をむくひーたりもあり又水中より
ぶらぶらふかりるの徒あれをむびよひぬく
灰吹の産のあぐらとまづむとも尸かま子あま笑あはれふ
まのつぎぬ娼いしせの寝ぐれいざや急いそ
ぐんぬ明るが赤きみと人やとぶらん鬼おによ
うまの牙の丸心の腰こし服ふくやまのうけそし白
たぐのかねえ越中一の玉境たまがきせんどー谷のかこ

けりり 肛門こうもん寺でらとて名りー 中々大原の古江
うまぬみあみ援あのとうりあふして金たの宿
うそ 三々 とうり

神矢矢に渡段

ねめきあふ濃あふ橋はしと笑て曰い汝な家や才さいの清きよき
を恥はじは濃あふ橋はし登のぼりて曰い汝なも濃あふと接あらんば

淡く永も淡とあるは甘うるとも言ふ想ふ
本不二あり一日吉田冠子ありて淨瑠璃
の蛇と淡く言ふ也されど盲ハ蛇ハ畏む
小戸ハ保方餅子所と不徳多事上の事
何れも初頃の切之頃の目のはれみそが事
あはれ其餘ハ園雲子綴合せども今を
の保方の業と云ふも初日の急あれを引去

と園子違あはれ技合も是されども
うん淡の言はれも混材の混字ハ容
多まへ寅の初事申旬保方の甲
福内鬼外まど先もあはれ淡と

嫩葉相生源氏後序

古語曰寸も毛手いことあり尺も短ま

ありとられむ未練を買者ハ價が中々
其丈長一とどども長一とせし時を
買よりの價多しとてまじ難一といふも
みどり一とせして予り戲し作ぬる嫌案を
お世深氏九段後と東物の芝居の
習ふれハ末の之と幕とのとを洋判を
みて程進てま出さんと先六段目まで九段

らりよ尚正月二日より如月下旬の今よ
五つまで引續ての大入様切あはら
もさらりより二の目とのけぐん毎雪の如く
世あり舞臺の役人乃山を築く入る
あまき務よ今と末に終ハ趣向のこま
りまごをさく探しはさるるを洋路福を
あめむ人々さきりよ正午をやくとや

が 穢を帯びてくさくさたるが けがらひは止むとて
と おもひて ちぢぢと 生い茂る 穢の
地ちぢぢと ちぢぢと 文の ちぢぢと ちぢぢと
の 月さ 蜀江の 錦と ちぢぢと ちぢぢと
を ちぢぢと

安永二年癸巳二月三十日 福ゆ鬼お徳

アヤノミツノ木の葉

おんたけ

まよとびぐら

ひさ

仕人

ロー

世の上のトエノ様は へや上作也 我朝乃

風俗も 目出でたるものなり しの 浅子も

合やらの ちぢぢと ちぢぢと ちぢぢと ちぢぢと

廓に ちぢぢと ちぢぢと ちぢぢと ちぢぢと

此出る事れをききては、
真^{まこと}の縁ある沼とて、
べつれ何ぞや野^{やが}夫^むを解^と店^{てん}と出^い下^げ戸^こ
めらとて、
及^{およ}びの池^{いけ}才^{さい}ありは、
身^み務^む手^てれりや、
を解^と何^{なに}ぞ、
先^{まづ}疾^{やく}持^{もち}ハ

胸^{むね}を苦^{くる}し免^{めん}症^{しやう}氣^き持^{もち}ハ、
女^にの末^{すえ}ハ、
と解^と何^{なに}ぞ、
あつとて、
高^{たか}を、
破^{やぶ}り、

やうなり 無^くはなを新^にの破^つて一^つ徳子^ねや様^や
がう月とえらうらうて味^{あじ}をさする^い理^り座^ざを
ろく^ろな^なり^りでふ^ふあ^あれ^れども只^{ただ}水^{みづ}を^を物^{もの}様^{やう}の^の出^い
ま^まと^とり^りの^のち^ち丈^ぢと^と結^{むす}とも^もち^ちり^り神^{かみ}とも^も合^あを^を
とも^も是^{こゝろ}斗^とら^らお^おま^まて^てふ^ふ一^{いっ}盃^{ぱい}の^のと^とひ^ひ身^み福^{ふく}四^し
界^{かい}外^{がい}先^まけ^けの^の新^{あたら}浄^{じやう}を^をり^りと^と出^いせ^せとも^も衣^い袋^{ぶくろ}も^も
あ^あら^らむ^むを^を及^{およ}び^びも^もり^り一^{いっ}江^え戸^この^のお^おれ^れが^がお^お目^め

ま^まり^り一^{いっ}大^{だい}山^{さん}水^{すい}多^た多^た詣^ぎの^の及^{およ}び^びも^もり^り一^{いっ}旅^{りょ}せ^せ之^の及^{およ}び^びも^も
及^{およ}び^びも^もり^り一^{いっ}大^{だい}山^{さん}水^{すい}多^た多^た詣^ぎの^の及^{およ}び^びも^もり^り一^{いっ}旅^{りょ}せ^せ之^の及^{およ}び^びも^も
と^とり^り一^{いっ}大^{だい}山^{さん}水^{すい}多^た多^た詣^ぎの^の及^{およ}び^びも^もり^り一^{いっ}旅^{りょ}せ^せ之^の及^{およ}び^びも^も
あ^あい^いの^のあ^あも^もけ^けら^らる^るあ^あも^もり^り一^{いっ}大^{だい}山^{さん}水^{すい}多^た多^た詣^ぎの^の及^{およ}び^びも^もり^り一^{いっ}旅^{りょ}せ^せ之^の及^{およ}び^びも^も
構^{かま}り^りお^お答^{こた}へ^へあ^あら^られ^れて^て水^{みづ}を^をお^おけ^けら^らる^るあ^あも^もり^り一^{いっ}大^{だい}山^{さん}水^{すい}多^た多^た詣^ぎの^の及^{およ}び^びも^もり^り一^{いっ}旅^{りょ}せ^せ之^の及^{およ}び^びも^も

同上後日

先達る事ヤ上は通式文に文のちし芝居
海老雑魚の魚まど一寸法師の脊
くへきりくへあつうましいわりまた根で
右いの根とすあつうハ芝居と虫何もア下不
判友見負者我具負弱ひ者とん捨ぬハ
実我母一きお江戸の清氣家あつうこの
てへ入るてを根の穴く雨の漏をも虫とい

虫生らる虫負虫癖怒とやま戴
どあやうあやう芝居の花あよぬをり偏
虫生虫力之と雑者仕合よな何とぞよ
あれ虫慰よお成るねとんハやんけよとやれど
ふい神の振くしとて狐系う駒も野の合ま
く今も虫は抵打で候つれよ氣どり
あまつく坊明を神えたりお代のきりあ

やうとのさひけりまを尋ねし二七の泥仕合
ハ目九つ目大切と追て出せし入出後ハハ
いなりとむねとさうだつたが不都合がらけ
此目よりきハ勿論なれどもあつても結負て
務トヤと市田中様由具負の御座を
け交の早幕目濃志の氏子とさあれり
また之とあへると市田様もあきまはせり

三月日

結城

荒所灵彩田神座後序

近松老翁世と戯場を辟て敷の浄瑠璃
を能く筑後播磨乃名人方って普く世に
よび後々勧善懲惡世と教れたの一助
近松氏の本心より中頃千前軒文耕堂

が類も亦を松氏の意をうけて作れる不正
くれが此を甚盛なりといつてはさう衰へ
今時の化名は固とこふてはなしく文法をあぐ
手よ於業を弁へば物と遠近は傳へ耻を千
子残を讀ぬ同士の女同士の金壘雷とこは
ど盲蛇おまからどされども五年り三年り一
大も歩ぢは棒まきよるの鉄砲まれ當

くらんの薬はくらん病が買よする連牛
も淀子牛も淀とれも作るも作者居るが
花は花でんごる石飛仲るの志んごは
そのくらんの敵龜他を泥水よ足と踏込
首をそのころ教白

亥のくー卯月上旬 福内鬼外書

餅の年

此れぐらゝまじらふ一餅に向ひては
うらやまのうらやまのこころとあつ
けりといふを向上らうやゆれど借金乃
即ち身や質の利上のまぢりつと精と
つては、門人々名子なる者あつて目
あつと暮西のまぢり採るゝあつてあつてあつて

あつて餅のなりとて、人々市の如く
いふつと、いふ程に街は満つた、おれは先生
の鏡を穿んと、一技と携へて、予答て
日天地の産まかゝる、あつてもあつてもあつても
もあつて、おれもこれハ餅といつて名をい
ふて、食へべきはあつて、おれは餅といふべし、
又我家別はあつて、あつて、あつて、食

糰ふどら—又は花実の外いんは糰いんありて形かたち松まつうさの
小こきざとくせいのま糰いんの實みのぶの實みのど—ををホ
別に一ひとおろりを名なををろくがくとと今いま
餅もちととろるろろくがくの初はつ生またれ勢いきぢ悪わるく
—て一ひと処ところまわまわてままりりるおろりを名なををろくがくとと今いま
本ほんの處ところろりを名なををろくがくとと今いま
ああららどど實みああららどど又また今いま年としののととををままああらら

き年とし毎ごと二にあれどもも糰ふどらハ氣きを付つけざればば品しん
やむのの今いま年としイいろろどども俗よこ人ひとの目めみみあれ
—よう一ひと大おほ形かたちまま吠ゑて百ひゃく犬いぬ声こゑまま吠ゑ己おのれろろ悪わる
ををままららとといいままららどど本ほんの餅もちののろりりととろりり
ものものめめろろどど只ただ其そのののととろりりももああららどど糰ふどらの
吉きちろろどど—ととこれこれをを糰ふどらととの糰ふどらををろりりるるららんん
金かね買かひ欲よよりよりおおととれれりり佛ぶつととおおでで極ごく未みへへちちるる

又おのけをぐるふをよあるは凶なり後醍醐
の御宇龍子^{りゆうし}を執^とりて中御^{なかつみ}を養^{やしな}ふ房^{ふさ}の
々^々譯^{わけ}せしも御子^{みこ}當^{あた}りしよよあるはや予
謂^{いわ}をも亦陰^{いん}陽^{やう}の大^{だい}なるなりとあるはざらふ
あるり造化^{くわいけ}のかぎりありし御子^{みこ}とてはてなる
べし^{べし}豈^あとくく全^{ぜん}きよありんや五^ご瓣^{ぱん}
の花^{はな}六^{りく}瓣^{ぱん}の咲^さき^きか子^この中^{なか}形^{かたち}なる新^{しん}迦^か

如来^{にょらい}の黄^{わう}疸^{たん}なる福^{ふく}祿^{りく}の天^{てん}窓^{まど}の長^{なが}き
後^{ちん}也^ぜ八^{はち}節^{せつ}の朝^{あさ}が^ある^る腕^{うで}の長^{なが}きも皆^{みな}同^{どう}
出^い来^きそ^こなるなり六^{ろく}瓣^{ぱん}の花^{はな}ハ必^{かならず}ま^ま実^み女^{にょ}仁^{にん}
ありて人^{ひと}を殺^{ころ}せ^せ二^{ふた}子^こ若^{わか}子^こと孕^{こころ}婦^ふ人^{にん}合^あは^はハ
二^{ふた}子^こを養^{やしな}ふ^ふ俗^{しやく}能^{のう}なるなり又^{また}具^ぐ其^{その}真^{まこと}の^{まこと}の^{まこと}の^{まこと}
く^く押^{おし}て^て理^りと^と行^いふ^ふ時^{とき}ハ^ハ叙^{じよ}の^の黄^{わう}疸^{たん}ハ^ハ實^み女^{にょ}仁^{にん}
の^の肌^{かわ}と^と骨^{ほね}と^とつ^つつ^つを^を備^{そな}へ^へれ^れと^とて^と體^{たい}を^を全^{ぜん}る^るハ

凡そもの巨燧^{ことう}よあつてはみ辨^{わか}るま金と成
て偽者と成^{なり}て又指^{さし}を切ておぼよこと
やられぬが^しの金の拵^{しら}をら^らり
射交^{やこ}ぬの独^{ひと}強^つ盗^{ぬす}人の月^{つき}を悪^{わる}くするべし
損^えをて益^{えき}を^とり^て一^いた^はふ^は佛^はに^は生^なれど
る^のの^の偽^{いつはり}者^{もの}と^らる^るの^の理^{こと}を^まき^まあ^らず
又福^{あゆ}福^{あゆ}の^の天^{あま}穿^あが^らる^ると^{して}南^{みな}極^{きょく}星^{せい}の

化^か身^みとしつ^つも^もて^て事^{こと}の^のあ^られ^ば法^{はふ}會^{かい}
が^が為^なる^る胡^こが^が腕^{うで}の^の長^{なが}き^きハ^ハ馬^ば丸^{まる}と^と盗^{ぬす}人^{ひと}の^の
守^{まも}り^りの^のあ^られ^ばも^もつ^つま^まる^る外^{ほか}に^に生^なれ^ばと^とる^るの^のあ^らり
け^けの^の生^なれ^ばと^とる^るい^いん^んも^も世^よに^にあ^らる^る一^いせ^せれ
付^つの^のか^かこ^この^の業^{ごう}移^{うつ}りの^の業^{ごう}本^{ほん}其^{その}盤^{ばん}始^{はじめ}
態^{たい}女^{にょ}なる^るは^は角^{かく}ある^るの^の類^{るい}なる^る生^なれ^ばと^とる^るい
み^みと^とる^るの^のの^の録^{ろく}に^に似^にたる^るも^も同^{どう}造^{ぞう}化^か

の細工屑さいくずあり何ぞかゝる小おを以て其の
綱福くわふくと論ろんぜんやあ又また吉凶きちきゆうを去るし其の
あが天地とつる名人のなひん惟たちち子こ書し夏あ秋あき
冬ふゆとつる上うへの細工さいく人のひと手てが拵ぢくく居いれば
まご外うへ子こををららまま越こ向むかひひももままべべ一いっ是こゝ元もと人ひと
のまごまごする言ことをを徳とくををししててぬぬありあり去こ年ねん
ののままごごするするををらんらんににたたああがが糸いとととつつるるめめいい

あま餅あまもちありありととてて群ぐん集じふををししももああるるののまま子こ付つ
ととるる癖くせののどどききももののままりり今いま年ねんののああらら小こ鼻はな
ありあり去こ冬ふゆ意い内うち子こ餅もちののままりりたたるるああらら抑おさまりり
け外うへ子こ餅もちののままりり本ほんののああららとと同どうババ兵へい編へんとと書しるる
ののままりり人ひと笑わらひひとと去こるる

宝曆十一年巳年誕生上の九日

あつらひてあがみし七ナミのれを山とほ
政申とてきてあつらひしなまもあま
と申出たてしを出世言や海をいせ
増えよあまも申せよ

追加

ちよ京細見天の浮橋序

あつらひてあがみし七ナミのれを山とほ
天地開け始とより天の浮橋のちとみて
あつらひてあがみし七ナミのれを山とほ
ありおとろひつらればりやくとれ
こつ蒲園とあつらひてあがみし七ナミのれを山とほ
女郎よ長崎の衣装をときせて京の揚屋

でえ祿年中^{りくちゆう}の^{しん}今のお江戸の^{きん}喜ぶ^{きぶ}
梅ヶ香と梅まう^う柳よつぎ^{りゅう}あ^あ
どく^{どく}り^りの^のひ^ひひ^ひ一^一繁華^{はんか}の^のて^てり^りづ^づん
それ^{それ}う^うを^をあ^あま^まて^て見^見ぬ^ぬ

右の一^い編^{へん}は^は書^{しよ}編^{へん}集^{しゆ}の^のお^おろ^ろう^う四^し方^{ほう}よ^よか^かと^とち^ち体^{たい}り^りが
坊^{ぼう}さ^さり^りや^やま^まり^りと^と北^{きた}里^りよ^よを^をや^やる^る魚^{ぎよ}躍^{やく}の^の市^しの^の礼^{らい}帳^{ちやう}
て^て口^{くち}づ^づり^りは^はま^まり^りま^まけ^けの^のま^まら^らい^いへ^へり^りな^な

四方山人誌

